二十五、治郎兵衛と孟宗筍

　今からおよそ二百年前の安永元年（一七七二）、京橋で廻船問屋を営んでいた山路治郎兵衛という人が、戸越村に別宅を建てて、移り住んできました。この辺の村々の農家は、畑で米、麦、粟の穀物を作り、その他にも江戸市民向けの青菜や大根などの野菜を作って出荷していました。しかし、畑地の大部分が台地の上にあるために、農耕のための水が不足して、収穫は少なく、農家の人々は、いつも貧しい暮らしを送っていたそうです。

ある日、治郎兵衛は、芝（港区）の薩摩屋敷の近くを通りかかった時に、幹が太く青々として、丈が高く葉の繁った孟宗筍を見て、胸をときめかせました。

「この竹を、荏原の地に植えられたら・・・」

数日後、治郎兵衛は、意を決して、薩摩屋敷の門をたたき、「見事な孟宗筍を株分けしてもらえませんか？」

と、たのみましたが、そっけなく追い返されてしまいました。しかし、彼の決意はくじけるどころか、ますます強くなり何日も考えた末、名案を思いつきそれを実行しました。治郎兵衛が考えたのは、薩摩屋敷に出入りする植木屋に頼んで、弟子にしてもらうことでした。

　それからおよそ一年後に、治郎兵衛が、やっと数株の種竹を手に入れて、自分の家の近くに孟宗筍を植えつけたのは、寛永元年（一七八九）三月のことでした。治郎兵衛は、何度も何度も品種改良を加えながら、数年後には庭一面に繁殖させ、この筍が商品として売れることを確かめると戸越村や周辺の村の農家に、栽培を奨励し、筍を江戸市中の人々に売り、戸越村の農民に、現金収入の道を開いたのです。

治郎兵衛は江戸で、孟宗筍の元祖として有名になり、その功績は、長く語り継がれました。治郎兵衛はそれから十七年後にこの世を去り、その翌年の文化三年（一八〇六）に、治郎兵衛の子三郎兵衛が、父の一周忌に、父の歯骨を埋め、その上に碑を建てました。碑の正面には、

　櫓も楫も、　弥陀にまかせて　雪見哉　　　釈竹翁

と、治郎兵衛の辞世の句が刻まれていて「筍の碑」として知られ、品川区の文化財に指定されています。

孟宗筍の栽培は、明治時代から大正時代にかけて、戸越・中延・小山・上下蛇窪の村から目黒までも広がり、筍や竹材がこの地域の特産品になりました。また、目黒不動尊（龍泉寺-目黒区下目黒三丁目－）の前にあった料理屋では、不動尊にお参りに来た人々に“たけのこ飯”を出して、「目黒の筍」とその名を一層広めました。

孟宗筍は、高さがおよそ十二メートル、直径が約三十センチメートルにもなる大きな竹で、原産地は中国の江南地方です。日本に伝えられたのは、直接京都へと沖縄から南九州へと二つの経路があるといわれています。

薩摩藩の領主で島津家二十一代目にあたる吉貴公が、この竹が琉球（沖縄県）にあるのを聞いて、献上するように命じたことにより、彼の鹿児島の別邸に植えられ、数年後に株分けされて、江戸の薩摩屋敷にも植えられたものです。

この「孟宗筍」の名前の由来は、

今から約千七百年もの昔、中国に呉という国がありました。この国に孟宗という名の大変親孝行な男が住んでいたそうです。ある年の寒い冬の最中に彼の年老いた母は、病床に伏していて、急に筍のなますが食べたくなり、息子の孟宗に言いました。どんなに野山をかけめぐっても、真冬に筍が生えているはずはありません。しかし、孟宗は、折りから雪の降りしきる中を筍を探しに出かけました。すると、日頃の彼の篤い孝徳心が天に通じたのでしょうか。雪の中から見事に一本の筍を掘り出し、大喜びで家を持ち帰ると、老母の食膳にのせたということです。

この中国に伝わる故事から、江南竹を孟宗筍と呼ぶようになったのだそうです。